〈青森県史〉の窓 143

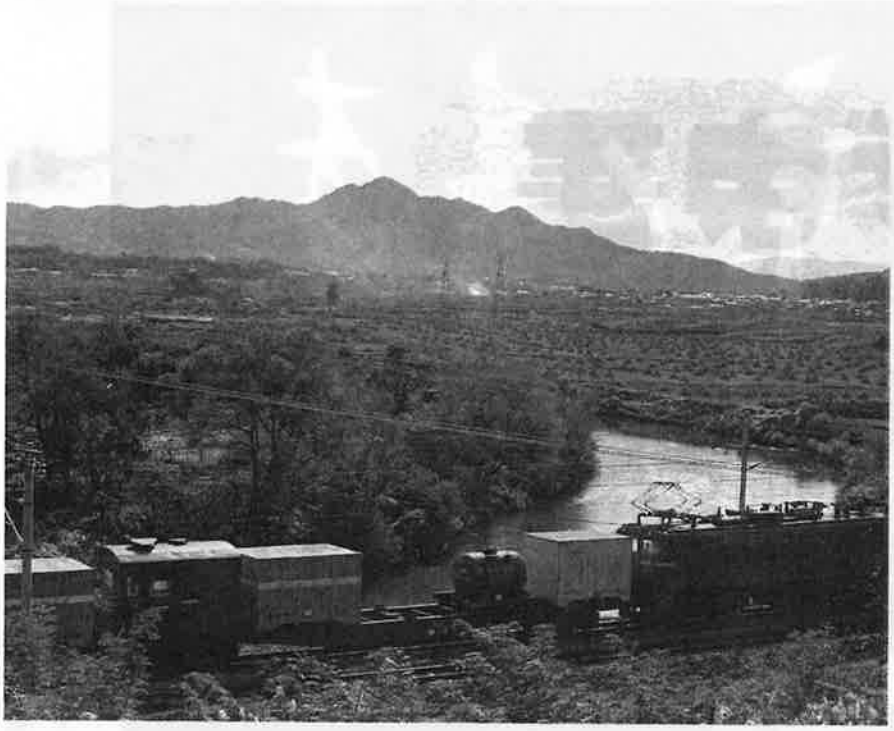
デーリー東北文化圏

中園 裕
（県民生活文化課 県史編さんグループ主幹）

青森県の三八地域（三戸郡の町村と八戸市を総称、県南地域ともいう）は、岩手県北地域と深い交流があることで知られている。双方共に南部藩領だった歴史があるからだが、今回は別の視点から三八地域の特徴を見てみたい。

三八地域を考える上で馬淵川の存在は欠かせない。岩手県北から青森県の三戸郡内を流れ、八戸市へと流れるが、中流にあたる岩手、青森の県境付近には平野が少ない。このため川沿いには陸上交通が集中している。

藩政時代には奥州街道が通り、近代以降は国道4号や国鉄が馬淵川沿いを併走する。東北新幹線は少し外れるが、ほぼ馬淵川沿いを通る。東北自動車道だけが岩手県北から青森県の弘前方面へと旋回するが、八戸自動車道が馬淵川を遠目に見つつ八戸方面へと結んでいる。川沿いを走る交通網を通じて、三八地域の人々は県境を越えた岩手県北地域と交流を続けてきたので



名久井岳と馬淵川と国鉄
1975（昭和50）年10月15日・青森県史編さん資料

ある。

この地域の特徴を知る上で八戸市の存在は見逃せない。青森県第2の都市であり、東北地方最大の工業都市であることから、三八地域の中心地に位置づけられてきた。岩手県北地域は県都盛岡市から遠く、八戸市に匹敵する都市が少ない。このため八戸市に通勤し、買い物に出かける人たちが多い。双方に縁戚や姻戚関係が多く、政治的な人脈にも大きな影響を与えている。

事実、八戸工業高等専門学校（八戸高専）の設置をめぐる八戸、青森両市の対立で、最終的に八戸市決定の政治的決断が下されたのは、岩手県北地域の議員が三八地域の議員に加担したからだ。破産した南部バスを救った岩手県北バスの事例も記憶に新しい。

こうした歴史的事情がある中で、三八、岩手県北の両地域をつなぐ圏域の構築が繰り返し主張されてきた。特に高度経済成長前後からは、「北奥羽」と称する圏域構想が地域開発計画などで主張されるようになった。

北奥羽圏域構想を主張し続けてきたのがデーリー東北新聞社である。八戸市に本社を持つ同社は、青森県の県都青森市や津軽地域の中心である弘前市とは別に、八戸市を中心とする圏域構想の確立に努めてきた。弘前市で生まれた東奥日報は、青森市に本社を置き、津軽地域をはじめ下北、上北両地域に多数の購読者を有する。デーリー東北が東奥日報に対抗するため、三八地域を自らの牙城と見なすのも、企業である以上当然だった。

デーリー東北の地域欄には「三八」「上十三むつ下北」の他、「岩手県北」がある。県を越えて地域欄を有する地方紙は全国的に見ても珍しい。三八地域ではデーリー東北を購読している人々が多い。東奥日報も三八地域では劣勢であり、八戸市には全く歯が立たない。三八と岩手県北の両地域は「デーリー東北文化圏」といってよいだろう。

津軽地域の人々が岩木山を愛するように、デーリー東北文化圏の人々は名久井岳や戸来岳、階上岳に親しみを感じる。掲載した写真には、名久井岳を背後に馬淵川が蛇行し、その横を国鉄が走っている。三八地域を特徴付ける光景でもある。旧福地村と旧名川町の境にある八木田の跨線橋近くから撮影したもので、「達者村百景」にも選ばれた名久井岳眺望の適地でもある。